

共存と協調の時代に思うこと

研究組織委員会委員長 古賀 利郎



20年以上も前のこと、ヨーロッパでの学会の折り、昼食のテーブルを囲んでの雑談中に、「東洋からみるとヨーロッパはあたかも一国のように思えるが、果たして統一できるものだろうか、」と質問を發したことがある。これに対して、侃々諤々の議論が起こり、ある国の若い研究者が、「こんな議論は真っ平だ、」とテーブルをたたいて立ち去った。時代が移り、欧州共同体 EC が誕生した。言語と通貨の違いはあるが、EC 諸国間では国境がないのと同様に往来自由となった。そして最近、ヨーロッパ主要国の研究者が同じテーブルを囲んで、アメリカを意識し、環太平洋にも気を配りながら、ヨーロッパにおける専門分野での研究の活性化をどう図るかについて議論する場面に会わず機会があり、まさしく共存・協調の時代に到来したとの感を深くした。また、宗教におけるユニバーサリズムと同様に、科学技術や学術には、民族や国境を超えて伝達され普及発展するという普遍性が存在するが、人と人とのコミュニケーションの媒体である国際語として、ヨーロッパで英語が素直に定着しつつあることが如実に窮えた。

かつて世界が二極化し、自由はおろか生命をも否定するような闘争や冷戦という不幸な対立の状態が続いた時代があった。最近、国際情勢が激しく変化しつつあり、その中に、あまり適切な表現ではないかもしれないが、標語的に、対立・競争と共存・協調という二つの構図が錯綜しているのがみられる。ゲームやスポーツのような公平なルールと審判の存在しなくなった競争ないし抗争では、互いに独善に陥りやすく、相互不信などによって、対立が苛酷となり、なかなか脱却できなくなるようだ。しかし、現代の歴史が示すように、冷戦構造の崩壊という壮大なるカダストロフを契機に、国際関係の改善とか、人類の将来にかかわるような地球環境とかの問題は、共存・協調という構図の中でこそうまく解決できるという認識が、夢から現実に変りつつあるようだ。

地球規模で政治、経済、社会、文化、諸々に変革の時期を迎えつつある現在、また、自然と人類との共存の問題がクローズアップされるようになった現在、諸々の学会で、既に、いろんなレベルで相応の努力が払われているとはいうものの、更に国際的に開かれたグローバルな視点から、学会活動の意義、社会的役割、等について問われる時がやってくるのではないかと思われる。